北方山草（38）: 69-75. March 2021

北海道大学総合博物館陸上植物標本庫（SAPS）で 2019年4月以降に新たに見つかったタイプ標本

札幌市　首藤光太郎[1]
福島市　黒沢　高秀[2]
札幌市　高橋　英樹[3]
北海道大学総合博物館植物ボランティア *

* 石田愛子、蝦名順子、大原和広、桂田泰惠、加藤　恵、加藤康子、金上由紀、菊地敦司、児玉　諭、駒谷久子、坂上美裕己、嶋崎太郎、須田　節、田端邦子、高橋美智子、中川博之、新田紀敏、林　裕子、藤田　玲、船迫吉江、星野フサ、細川音治、堀之内詢大、本多丘人、道川富美子、目黒嘉子、矢野ひろ、吉中弘介、与那覇モト子、和久井彬実

はじめに

北海道大学総合博物館陸上植物標本庫（SAPS）では、タイプ標本は通常の標本棚に配架せず、耐火金庫内で保管している。タイプ標本の数は300点以上とされるが（伊藤1987）、すべてが金庫内にあるわけではない。未整理標本群や、すでに配架された標本の中から新たに発見されることがある。また、標本にタイプ標本であることが記されていないために見落とされてきた場合もある。ここでは、筆者の一人首藤が北海道大学総合博物館に就任した2019年4月から2020年12月にかけ、SAPSで新たに見つかった4分類群のタイプ標本について紹介する。なおこれらの標本はいずれも、新たなSAPSナンバーが付された上で現在は耐火金庫内で保管されている。

1. エゾノタイツリオウギ *Astragalus yezoensis* Miyabe et Tatew. のホロタイプ

エゾノタイツリオウギは、Miyabe & Tatewaki (1938b) によって記載・発表された。発表の際は近縁種であるタイツリオウギ *Astragalus shinanensis* Ohwi / *A. membranaceus* (Fisch. ex Link) Bungeと比べて幅が狭い小葉や托葉をもつことなどの形態的特徴から独立種とされたが、Yamazaki & Kadota (1986) によってタイツリオウギの1型とされた後、近年の図鑑・文献には登場しない（例えばOhashi 2001, 大橋2016）。ただし米倉・梶田（2003-, 植物和名ー学名インデックス YList) は本種をタイツリオウギのシノニムとして扱っている (URL:http://ylist.info, 2020年12月4日版)。

2019年7月、未整理標本群の中からマメ科ゲンゲ属 *Astragalus*、オヤマノエンドウ属 *Oxytropis* などを含むおよそ100点の標本が発見された。これらの標本には1987年に東京大学理学部小石川植物園の標本庫により作成された書類が添付されており、貸与を受けた標本を返却する旨が記されていた。1987年に東京大学から返却を受けたのち、標本棚に戻されることなく30年以上に渡り未整理標本群の中で眠っていたものと考えられる。これらの標本の中に、本種のタイプ標本に該当する可能性のある標本3点が含まれていた。

Miyabe & Tatewaki (1938b) は発表の際、北海道帝国大学農学部の標本庫に収蔵された、山本岩亀が1938年8月10日に後志